

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	村 杉 謙 次
論文審査担当者	主 査 天野 直二 副 査 野見山 哲生 ・ 浅村 英樹
論文題目	The Development and Trial of a Medication Discontinuation Program in the Department of Forensic Psychiatry (医療観察法病棟における服薬中断プログラムの開発と試用に関する研究)
(論文の内容の要旨)	<p>〔背景と目的〕病状の長期的安定や再被害行為防止といった触法精神障害者治療の目的を達成するためには、服薬アドヒアランスの向上が必要不可欠である。日本初の触法精神障害者の医療と社会復帰に関する法律となる医療観察法の対象患者の疾病の多くは統合失調症であるが、これは各種疾病の中でもとりわけ服薬アドヒアランスの向上が得にくいと言われている。医療観察法対象患者の入院治療を行うにあたり、服薬アドヒアランスの向上を促すために、新規抗精神病薬の単剤治療や疾病教育をはじめとした多角的なアプローチが標準的に実施されているが、これらのアプローチによっても、服薬アドヒアランスが向上せず、頑なに薬物療法を含めた治療を拒否し続ける患者も存在する。そのような患者に対し、個々の特性に合わせて構造化した方法で抗精神病薬を中断し、精神症状の変化を主観的かつ客観的にモニタリングすることで薬効の自覚を促し、ひいては服薬アドヒアランスの向上を目指す、服薬中断プログラム (Medication Discontinuation Program : MDP) を開発した。我々は、精神科の治療プログラムにMDPを導入する価値があると考え、MDPに何らかの有用性があるかどうかについて調査した。</p> <p>〔方法〕小諸高原病院医療観察法病棟において、新規抗精神病薬の単剤治療や疾患・向精神薬に対する心理教育といった標準的な入院治療を行なったものの、服薬アドヒアランスの向上が得られなかった7例の統合失調症患者に対しMDPを実施し、実施前後の薬に対する構えの調査票 (Drug Attitude Inventory-30 : DAI-30) の評点を比較した。MDPの長期的有用性も確認するため、MDP実施後6~14か月後にもDAI-30評定を実施した。さらに、DAI-30の全30個の質問項目を、①服薬の必要性の認識、②薬効の自覚、③薬に対する印象の3つの下位項目に分けて検討することで、服薬アドヒアランスの向上にどのような因子が影響するのかについても調査した。また、MDP実施中に実施されている他の治療プログラムが、患者の服薬に対する態度に影響を及ぼしている可能性を確認するため、介入群と基本属性を一致させた17例の統合失調症患者を非介入群として、介入群と同時期にDAI-30評定を実施し、前後のDAI-30評点を比較した。</p> <p>〔結果〕介入群において、MDP実施前後で、DAI-30合計点が有意に上昇しており ($-2.3 \pm 13.2 \rightarrow 18.3 \pm 9.2$, $P=0.002$)、6~14か月後のDAI-30合計点も 19.9 ± 8.5 との結果が得られ、評点の下降はみられなかった。DAI-30の3つの下位項目においても、MDP実施前後で評点は有意に上昇していた (①$P=0.015$、②$P=0.002$、③$P=0.014$)。また、非介入群においては、DAI-30評点の上昇は認められなかった。</p> <p>〔結論〕本研究によって、MDPが服薬アドヒアランスを向上させる可能性を持っていることが示唆され、MDPの効果は長期間持続することも示唆された。また、MDPが多角的に服薬アドヒアランスの向上に寄与することも示唆された。本研究は、試験的研究であり、いくつかの検討課題も存在しているが、MDPが、服薬アドヒアランスを向上させることが大きな課題となる統合失調症治療において、有用な治療プログラムになりうると考えられた。また、今後、MDPを司法精神医療においてのみではなく、一般精神医療においても実施し、MDPの有用性や限界をより明確にしていくことを検討したい。</p>